

問1

- ① 助詞 助詞連体形
② 助詞 助詞連体形
③ 助詞 助詞連体形
④ 助詞 助詞連体形
⑤ 助詞 助詞連体形
⑥ 助詞 助詞連体形
⑦ 助詞 助詞連体形
⑧ 助詞 助詞連体形
⑨ 助詞 助詞連体形
⑩ 助詞 助詞連体形
⑪ 助詞 助詞連体形
⑫ 助詞 助詞連体形
⑬ 助詞 助詞連体形
⑭ 助詞 助詞連体形
⑮ 助詞 助詞連体形
⑯ 助詞 助詞連体形
⑰ 助詞 助詞連体形
⑱ 助詞 助詞連体形
⑲ 助詞 助詞連体形
⑳ 助詞 助詞連体形
㉑ 助詞 助詞連体形
㉒ 助詞 助詞連体形
㉓ 助詞 助詞連体形
㉔ 助詞 助詞連体形
㉕ 助詞 助詞連体形
㉖ 助詞 助詞連体形
㉗ 助詞 助詞連体形
㉘ 助詞 助詞連体形
㉙ 助詞 助詞連体形
㉚ 助詞 助詞連体形
㉛ 助詞 助詞連体形
㉜ 助詞 助詞連体形
㉝ 助詞 助詞連体形
㉞ 助詞 助詞連体形
㉟ 助詞 助詞連体形
㊱ 助詞 助詞連体形
㊲ 助詞 助詞連体形
㊳ 助詞 助詞連体形
㊴ 助詞 助詞連体形
㊵ 助詞 助詞連体形
㊶ 助詞 助詞連体形
㊷ 助詞 助詞連体形
㊸ 助詞 助詞連体形
㊹ 助詞 助詞連体形
㊺ 助詞 助詞連体形
㊻ 助詞 助詞連体形
㊼ 助詞 助詞連体形
㊽ 助詞 助詞連体形
㊾ 助詞 助詞連体形
㊿ 助詞 助詞連体形

現代語訳……花も散り——春過ぎ花も散り、夏過ぎほととぎすさえ去ってしまうまで、あなたの許にもお伺いせぬままになってしまいましたよ。

見る所ありて——（その歌が良いと、私なりに）判断するところがあってあのように（「能因の歌に似ているが、うまい詠み振りで似ていることは欠点ではないと」申し上げたけれど、（歌合の）勝ち負けを聞かなかったうちは、むやみやたらと局外ではらはらしておりましたが（私の判断の通り勝ったと聞いて）「たいそう名譽なことをした」と（私の）心中では思われました。

問2

- ① カ・コ ② イ・ク

現代語訳……私が若いとき、大内の草子を見ました中に、「^{*}節会^{*}のころに雪がひどくつもったので、^{*}衛士^{*}におっしゃって橘の「^{*}橘につもった」雪を払わせなさったところ、傍らにある松で枝もたわわな松（の枝）が、うらめしそうにはね返って」と書いてありました。

《訳注》節会＝節日や重要な公事のある日に、五位または六位以上の諸臣を朝廷に集め、帝が出御して行なった宴会。元日・白馬（あおうま）・

踏歌・端午・相撲・重陽・豊明（とよのあかり＝新嘗会）などが恒例のもの。

衛士＝諸国の軍から選拔し、衛士府（のちに衛門府）に配された兵士。公事の雑役や朝廷の清掃などに従事した。

問3
3

現代語訳……（まして）いうまでもなく、劣っているような身で褒美（をもらうのは）、かえって気が引けるに違いない。

問4
⑥

現代語訳……さしあたっては（大事に）思う人にそれぞれ先立たれ、（この世に）置き去りにされてとどまっている晩年（であること）に（つけて）も、名残惜しく悲しいと思うことが多く、……

1

問1

- 1 ①過去（体験過去）・已然形 ②過去（体験過去）・終止形 ③詠嘆・連体形
- 2 ①過去（伝聞過去）・已然形 ②過去（伝聞過去）・連体形
- 3 ①完了・未然形 ②完了・命令形
- 4 強意（確述）・未然形
- 5 ①存続（継続）・連用形 ②完了・連体形
- 6 意志・已然形
- 7 婉曲・連体形
- 8 推量・已然形
- 9 適當（勧誘）・已然形
- 10 推量・終止形
- 11 可能・連体形
- 12 当然（義務）・連体形
- 13 尊敬・連用形
- 14 自発・終止形
- 15 可能・未然形
- 16 受身・連用形
- 17 ①使役・連用形 ②尊敬・連用形
- 18 使役・連用形

現代語訳……1 (遙かに遠いはずのあの) 唐の国でさえ夢に見たのだから (ほんとうは) 近かったのだ。もう思わない (「夢の中でも逢うこ

とのない) (二人の) 仲は、むしろ遙かに遠くかけ離れたものなのだなあ。

2 大きな榎の木があったので、人は、(その榎の木にちなんのでそこに住む僧正を) 榎の木の僧正と呼んだ。

3 わが玉の緒よ。絶えてしまうものなら絶えてしまおうがよい。この上生き長らえていると、(忍ぶ恋の思いを) こらえている力が弱まるといけないから。

4 もし龍がいたらたちまちに射殺して、(龍の) 首の (ところにあるという) 玉は必ず取ってしまおう。

5 そこに立っていた梅の (木の) 花 (の咲いた枝) を折って詠んだ (歌)、

6 男はこの女をこそ手に入れよう (「この女とこそ結婚しよう」) と思う。

7 (私を) 恋しいと思うような折につけて、(この手紙を) 取り出して御覧になってください。

8 (いくら生きても) 物足りずに (死ぬのが) 心残りだと思うなら、千年も (の長い年月を生きて) 過ごしたとしても、一夜の夢の (ように短い) 感じがするだろう。

9 (桜の) 花を見てからお帰りになるがよい (お帰りになりませんか)。

10 ああひどい。犬を蔵人が二人で打っていらっしやる。(犬は) 死んでしまふに違いありません。

11 その山を見てみると、登れそうな様子もない。

12 召使いに酒を飲ませせることは、(当然) 気をつけなければならないことである。

13 入道 (「平清盛」は、それならばと (言つ) て、御自身で中門の廊に出なさった。

14 住みなれた我が家 (のこと) を、後から後から次々といふ思い出してしまふ。

15 知らない人の間に横になって、まったく眠ることができない。

16 法師関白とまで呼ばれなさった。

17 格子を上げさせて、御簾を高く巻き上げたところ、中宮さまはお笑いになった。

18 夜がだんだん更けて行くうちに、(歌の) 題を出して、女房 (たち) にも歌をお詠ませになる。

問2

- ① 漢詩を詠む船に乗って、この和歌ほどの出来の漢詩をもし作っていたら、私はきつともっと名をあげていただろうに。〔解答例〕
- ② 下二段活用 of 動詞「あぐ」の連用形＋強意（確述）の助動詞「つ」の未然形＋反実仮想の助動詞「まし」の終止形

現代語訳……「漢詩を詠む船に乗って、これ〔Ⅱこの和歌〕ほどの出来の漢詩をもし作っていたら、私はきつともっと名をあげていた〔Ⅱ名譽

を得た・人々から賞賛された〕だろうに」と後悔なさった。

問3

⑦

現代語訳……何某僧都が、紫の上の遺志をすべて詳しく聞いておいたということなので、また（紫の上の葬儀に）加えて（葬儀で）しなければ

ならないことなども、あの僧都の言うようなことに従って行なおう（と思う）。

2

問1

〈訳〉ああ、味方がいればいいなあ、太刀を貰いたい〔解答例〕

〈選択肢〉2

現代語訳……太刀も折ってしまい、（その）折れた太刀だけを手に提げて、「ああ、（近くに）味方（の武者）がいたらいいなあ、（味方がいたら

その者に）太刀を（くれるように）お願いしたい」と思っているところに、……。

問2

- 1 願望（あつらえ）の終助詞「なむ」
- 2 強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「む」の連体形
- 3 ナ行変格活用 of 動詞「死ぬ」の未然形活用語尾＋意志の助動詞「む」の終止形
- 4 係助詞「なむ」

現代語訳……1 夏の五月を待って鳴く山ほととぎすよ。羽を振って今すぐにも鳴いてくれよ。去年聞きなれたあの声で。

2 毎年春になるごとに、流れる川（に映っている花）を、花そのものと思い込んで、（折ろうとしても）折ることのできない水に袖がぬれることになるのだろうか。

3 どうか（桜の）花の下で春に死にたいものだ。（釈尊が涅槃にはいられたという）その（同じ）二月の満月の頃に。

4 そんなことをおっしゃっても）袂以外でその白玉を包めましようか、包めはしませんよ。だから、これが、さあ、それですよと白玉を袂にお移しなさい、拝見しましょうよ。

問1

1 私が旅に出ていなくなったらもっと荒れ果ててしまうだろう。〔解答例〕

2 夫が生前に使っていた枕までも、まったく変わっていないこと〔解答例〕

現代語訳……（私が）目を離さないでいたときでさえ、次第に荒れていった（我が家の）庭も籬も、まして（私がいなくなったらますます荒れ

果てしてしまうだろう）とつい見まわしてしまって、……寝室の中を見ると、（夫が生前使っていた）昔の枕までも、（他のものと同

様）まったく変わっていないことを見るにつけても、いまさらながら（旅立ちが）悲しくて、傍（にあった紙）に書きつけた。

とどめおく……（旅立つ私がここに）残して行く亡夫の枕の塵さえも、私が行ってしまったら誰が（その塵を）払ってくれようか（

いや、誰も払ってはくれないだろう）

1

問1

1 〈意味〉①・② 順接の確定条件・恒常条件

〈訳〉財産があると恐れも多いものだし、貧しいと恨む気持ちも切実になる。

2 〈意味〉順接の確定条件・原因理由

〈訳〉十九日、天候が悪いので、船を出航させない。

3 〈意味〉順接の仮定条件

〈訳〉私の身にもし幸運があるならば、この雨は降らないだろう。

4 〈意味〉順接の確定条件・偶然条件

〈訳〉石山寺に籠ったところ、一晚中雨がひどく降る。

問2

① 連体修飾格

② 主格

③ 準体格

④ 比喩（連用修飾格）

⑤ 同格

⑥ 主格

現代語訳……この国の——この国の博士たちが書いているものも、昔のものは、しみじみと趣のあることが多い。

例のうち寝る——いつものように寝るころの鐘の響きに……、

山吹などの——山吹色の（衣）で柔らかくなった衣を着て、走って来た女の子は、たくさん見えた〔Ⅱその辺にいる〕子たちに似ているはずもない〔Ⅱまったく違っていた・子供たちの中で非常に目立っていた〕。

上にも聞こしめして——帝におかせられてもお聞きあそばせて、（そちらに）お渡りあそばせた。

問3

- ① 月の上を ② 歩いて参詣した ③ 名前を聞くやいなや ④ 船に乗りこんだ日から〔すべて解答例〕

現代語訳……水底の——水の底に映った月の上を漕ぐ船の棹に触れるのは（月に生えているという伝説の）桂（の木）であるにちがいない。

いかばかり——たいそう（強く）決心して、思い通りにならない心〔Ⅱつらい気持〕で歩いて（石清水八幡宮に）参詣したのに、……。名を聞くより——名前を聞くやいなや、すぐに面影を推測できる気がするが、……。

船に乗りし日より——船に乗りこんだ日から今日までに（船旅が）二十五日になった。

問4

- A Ⅱ 3 B Ⅱ 2 C Ⅱ 1

現代語訳……A 並一通りの筆跡〔Ⅱ書の腕前〕で書かせているのが良くなくございます〔Ⅱ良くないと思います〕ので、あなたに書かせ申し上げようと思うのです。

B （この）月は（以前の月と同じでは）ないのだろうか。（今年の）春は去年の春（と同じ）ではないのだろうか。（月も春もいつこうに変わりはないけれど、かつての恋人が住んでいたこの邸は荒れ果ててしまつて）ただ私だけがもとのままで（ここにやつて来た）……。

C 物は壊れたところだけを修理して使うことだ〔Ⅱ使うのがよい〕。

問5

2

現代語訳……そもそも万事につけて、（一般に）まずその根本（のところ）をよく明らかにして枝葉末節の部分を後回しにするのがよいは言うまでもないが、（実際には）そうとばかり限らないことであつて、（相手とする）事の事情によっては、枝葉末節の部分からまず解決して、（その）後に（明らかにした）枝葉末節の部分から）根本（のところ）へとさかのぼるのがよい場合もあるのだよ。

問1

c・g・i・i

現代語訳……高倉院の御治世に、御殿（「清涼殿」の上に、鶴が鳴いた（のが聞えた）のを、凶兆であるということで、どうしたらよいだろうかということであった（「朝廷で議定した」ところ、ある人が、（源）頼政に（鶴を）射させるのがよいということを（院に）申し上げたので、（院も）「きつとそうであるだろう（「それがよい）」と（お決めになつて、（頼政を）お呼びになつて（頼政が院の前に）参上した。この趣旨（「頼政に鶴を射せようと決まったこと」を（院が）おっしゃると、（頼政は）恐縮して宣旨を承つて、心の中で思ったことは、「（よく見える）昼でさえも（鶴は）小さい鳥なので見つけにくいのに、（まして五月雨の降る）五月の（夜の）空で、闇も深く、そのうえ雨まで降つて、何とも言いようがない（「どうしようもない」）。私はすでに弓矢の冥加（「武家に対する神仏の御加護」を失った）」と思つて、（源氏の守護神である）八幡大菩薩を祈り申し上げて、（鶴の）声をたよりに（その方を狙つて）矢を放つた。手応えがあるように思われたので、（そのあたりに）寄ってみると、（矢は）外れることなく（鶴に）当たっていた。

《訳注》鶴Ⅱとらつぐみ（鳥の名）。不吉な鳥と考えられていた。また、頭は猿、体は狸、手足は虎、尾は蛇の姿をした想像上の怪鳥のことという。宣旨Ⅱ帝の命令。また、それを記した文書。

問2

- ① 我が子が（息子が）女に執着したら困る〔解答例〕
 ② そうはいうものの〔解答例〕
 ③ もし女が自分の意志で出て行くならば〔解答例〕
 ／女を連れて出て行ってしまうのなら〔別解例〕

現代語訳……昔、若い男（がいて）、（容貌や才質が）悪くはない女（「下女」*）に恋をした。余計なことを言う（男の）親がいて、我が子が（下

女のような）女に執着しては困ると（思っ）て、この女を他（の所）へ追い出そうとした。そうはいうものの、まだ（女を）追い出さなかった。（中略）突然親はこの女を追い出した。男は、血の涙を流す（ほど悲しんだ）が、（女を）とどめる方法もない。（人が女を）連れて出て行った。男が泣く泣く詠んだ（歌）。

いでていなば……もし女が自分の意志で出て行くならば、誰が（女との）別れが難しい（と思う）だろうか（いや、あきらめもつくから別れるのは難しいことではない）。（しかし無理矢理連れ出されてしまったのだから）これまで（の切なさ）にもまして、今日は悲しくてならない

《訳注》下女Ⅱ中略部分に「女も卑しければ」云々とある。

問3

① 馬の中將

② 紫式部（作者）

現代語訳……（中宮の入内に従う車の列が続き）次の車には小少將と宮の内侍（が乗り）、（その）次（の車）に馬の少將と（私が）乗っていま

したが、（馬の少將が、私と乗ったことを）「いやな相手と乗り合わせた」と思っていた（様子な）のは、まあ大袈裟な（もったいぶった態度だわ）と、ますますこのような（宮仕えの）身の上を煩わしく思ったことでした。

問4

① まったく覚えておりませんで

② どうしてもこの世に生きていたくない

③ 思い出すことができません

現代語訳……氣を失っていた間にみな忘れて（しまつて）いるのでありましょうか、以前の様子などもまったく覚えておりませんが、ただ、か

すかに思い出すこととしては、ただ、どうしてもこの世に生きていたくないと（何度も）思つて、夕暮ごとに、縁側近くでぼんやりと（外を）見ていますと、庭前の近くに大きな木があった（その木の）下から人が出て来て、（私を）連れて行く氣がしました。それ以外のことは、自分でも、（自分が）誰（である）とも思い出すことができません。

問1

- | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|------|------|------|---|------|------|------|
| 1 | 尊敬語 | 2 | 謙讓語 | 3 | 尊敬語 | 4 | 謙讓語 | 5 | ①謙讓語 | ②尊敬語 | ③尊敬語 |
| 6 | 謙讓語 | 7 | 謙讓語 | 8 | ①謙讓語 | ②丁寧語 | ③謙讓語 | 9 | ①尊敬語 | ②丁寧語 | |

現代語訳……1 そこからお馬にお乗りになった。

- 2 お笛をさしあげる。(すると) 笑って、(その笛を) お取りになる。
- 3 心地も本当に苦しいので、食べ物も少しも召しあがらない。
- 4 中宮職にはじめて出仕したころ、何かと気が引けることが数多くあり、……。
- 5 (帝の) お鷹が逃げたことを(帝に) 申し上げなるときに、帝は、何も仰せにならない。
- 6 「不思議だ。(経済状態が) よくないと聞いておりましたほどよりは(よく整っている)」とお思いになる。
- 7 二条の後の御殿で、白い大桂をいただいて、……。
- 8 味方に御軍勢がお控えしていないので、臆病でそのように「(弱気になって鎧が重いなど)」お思いなのでしょう。たとえば(私) 兼平一人がお控えしているとしても「(〓傍にお付き申し上げているのが私兼平一人だけだとしても)」、他の武者が千騎(いる)とお思ってください。
- 9 かぐや姫は、ふだんも月を愛でていらっしやいますが、最近になっては、(その様子は) ただ「ことでもないようでございます」。

問2

- | | | | | |
|---|---------|---------|---------|--------|
| 1 | ①作者→中宮 | ②作者→大納言 | ③大納言→中宮 | ④作者→中宮 |
| 2 | ①作者→帝 | ②作者→帝 | ③作者→更衣 | ④作者→母君 |
| 3 | ①作者→ある人 | ②作者→読者 | ③作者→ある人 | |
| | ⑤作者→大納言 | ⑥大納言→中宮 | ⑦作者→大納言 | |

現代語訳……1 大納言殿が、(中宮さまのところへ) 参上なさっているのであった。(大納言殿のお召しになっている) 御直衣や指貫の紫色が、

雪に映えてとても趣き深い。(大納言殿は) 柱の許におすわりになって、「昨日今日は、物忌でございましたが、雪がひどく降りましたので、(中宮さまのことが) 心配になりました」と申し上げなされる。(中宮さまから)「(拾遺和歌集の歌に詠まれているように、雪が降って) 道もないと思ったのに、どうして(やってきたのですか)」とお答えがある。(すると、大納言殿は) お笑いになって、「(そのとおり、拾遺和歌集の歌にあるように、中宮さまが私のことを) しみじみと趣き深い(者だ) とも思っているくださるだろうか」と(おもひまし) て(わざわざ雪の中を参上したのです)「などとおっしゃる(お二人の) 御様子(を見るにつけて) は、これより何事が優るだろうか(いや、これに優ることはない、と思われる)。」

2 (桐壺の更衣の病状は) 日毎に重くおなりになって、たった五、六日の間にひどく弱ってしまったので、(更衣の) 母君は泣きながら(更衣の里下りのお願いを帝に) 申し上げて、(更衣を宮中から) 退出させ申し上げなされた。

3 九月二十日のころ、(私は) ある人に誘われ申し上げて、(夜が) 明けるまで月を見てまわる「(月を見ながら散策する)」ことがございましたが、(そのある人は) 思い出しなされる所「(女の家)」があつて、取次ぎをさせて(その女の人に) お入りになった。

問3

A 和泉式部(作者)

B あはれ

現代語訳……奇妙なこと「(お願い) だけれど、(私が) 日ごろものを言っている人「(付き合いのある女性)」が遠く(地方へ) 旅立つというので、(彼女が) ああ、情趣があるときつと言うに違いないようなこと「(歌)」をひとつ詠もうと思うのだけれど、あなたからおっしゃること「(あなたが歌みになる歌)」だけが(私にとっては) そのように「(趣き深い)」と思われるので、(私の代りにその女性に贈る歌を) ひとつ詠んでくれませんか。

問4

① ア

② エ

③ イ

④ イ

⑤ ウ

現代語訳……あの（皇子の）御祖母の北の方は、慰めようもないほどにお嘆きになって、せめて（桐壺更衣が今頃）いらっしゃるような所にだ
けでも尋ねて行きたい、と願っていらっしゃった結果であろうか、結局お亡くなりになったので、（桐壺帝が）またこのことを悲し
く思いになることはこの上ない（ほどであった）。皇子（である光源氏）は六歳におなりになる年であったので、（三歳で母桐壺更
衣を亡くした時とは違って）今回は（事情を）御理解なさって（北の方を）慕ってお泣きになる。（生れてから）数年間馴れ親しみ
申し上げなされた（皇子）を、（この世に）お残し申し上げ（て亡くな）る悲しみを、（北の方は）何度も何度もおっしゃった。（皇
子は）今（となって）は、（母方の人間がいなくなってしまったので）内裏にのみお住まい申し上げなさる。